

静岡県戦略課題研究「大井川・伊豆」

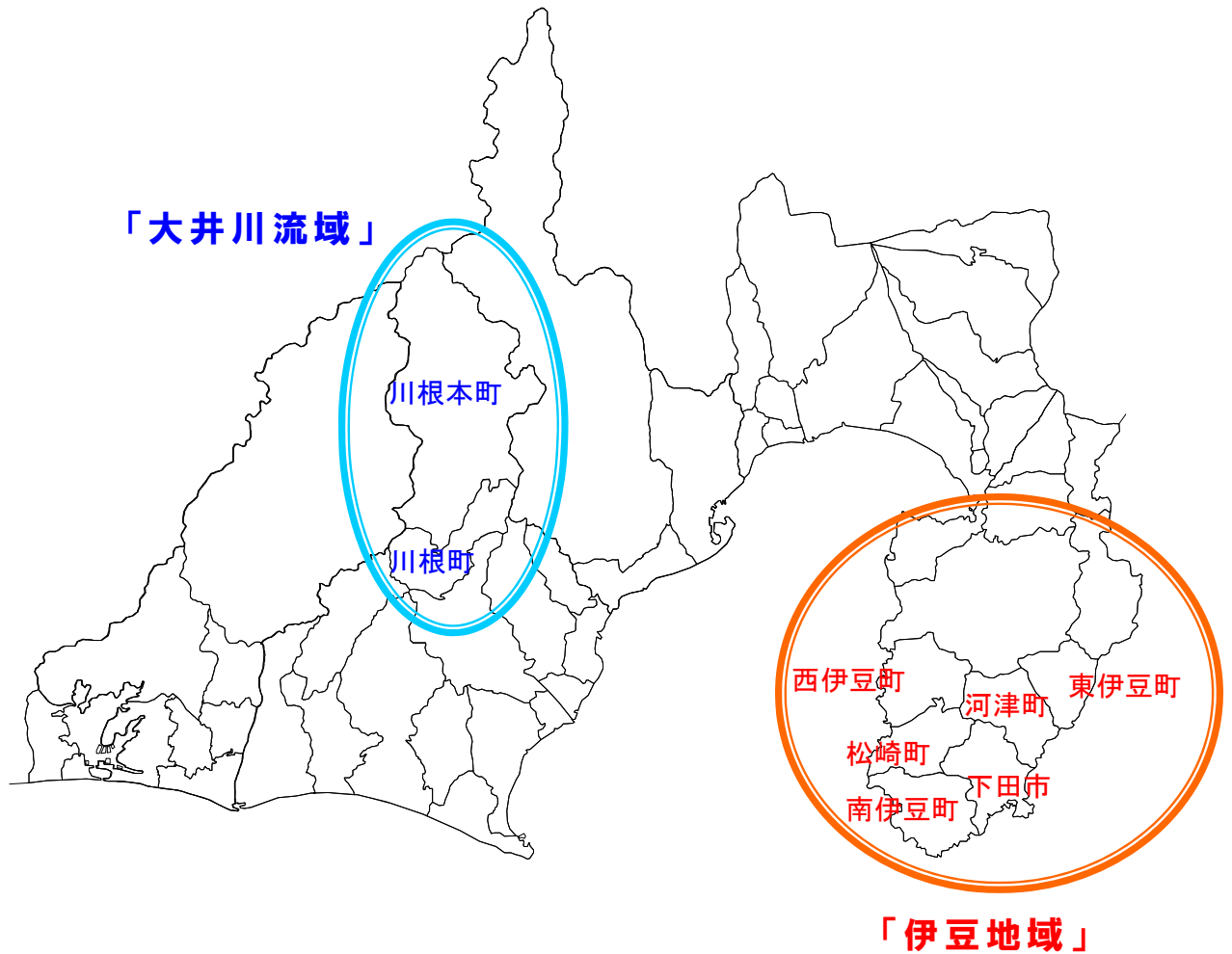
研究報告書(概要版)



平成 20 年 3 月

静岡県産業部

戦略課題研究「大井川・伊豆」の主な研究対象地域



< 研究報告書（概要版）の使い方 >

本研究報告書（概要版）は、静岡県が平成18年度から19年度にかけて実施した戦略課題研究「大井川・伊豆」の研究成果の概要を収めたものである。詳細な内容については、研究報告書（詳細版）を参照されたい。

静岡県産業部振興局研究調整室

概要版目次



大井川流域

研究テーマ

「自然と調和した大井川流域の景観形成」

- 報告1：地域性をふまえた大井川中流域の景観の保全と活用・・・・・・・・・・2
(京都府立大学、独立行政法人森林総合研究所関西支所)
- 報告2：地域住民と建築士等との協働による「大井川中流域“景観育て”」・・・・・・・・4
(社団法人静岡県建築士会)
- 報告3：大井川中流域における茶園景観の特徴と評価・・・・・・・・・・6
(静岡県農林技術研究所茶業研究センター)



伊豆地域

研究テーマ

「特徴ある自然景観を活かした『伊豆地域』の地域振興」

- 報告1：南伊豆地域における景観的特徴の解明と再評価・・・・・・・・・・8
(東京大学大学院農学生命科学研究科)
- 報告2：伊豆半島の特徴的な景観とその自然環境・・・・・・・・・・10
(静岡県農林技術研究所森林・林業研究センター)
- 報告3：地域協働型調査による伊豆半島の歴史的景観を構成するローカル文化圏域の解明・・・・12
(京都大学大学院工学研究科)
- 報告4：伊豆地域に自生するサクラの多様性の評価と景観形成への利用・・・・・・・・14
(静岡県農林技術研究所伊豆農業研究センター)

研究課題・研究機関 一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

地域性をふまえた大井川中流域の景観の保全と活用

京都府立大学*、独立行政法人森林総合研究所関西支所**

背景 目的

なだらかな斜面に端正な縞文様を生み出すお茶畑、山あいこだまするSLの汽笛、川面に映る多様多彩な橋の姿、これらのいずれもが大井川中流域、つまり川根町、川根本町を訪れる人々にとってこの地域の印象深いイメージをもたらしている。このような「印象深さ」とは、この大井川中流域の景観の「大井川らしさ」、すなわち「地域性」が具体化したものの例ととらえることができる。本研究では、大井川中流域を対象に、自然環境、および歴史・生活文化を包括的に把握するとともに、景観形成・維持メカニズムと関連する人々の景観認識を解明し、地域固有の景観の保全・活用策を提示することを目的とした。

研究 成果

1 大井川中流域における景観の形成と変遷

図1は、川根町・川根本町における1900～1990年間の土地利用変化を示したものである。白抜きの部分は、広葉樹林または広葉樹と針葉樹の混交林である。1900年頃の土地利用を茶園と集落の関わりに注目してみると、1)大井川沿いの茶園混在型の集落地域、2)大井川沿いの集落の周りに、水田と茶園が分離して点在し、茶園の面積割合はそれ程高くない地域、3)大井川支流沿いの茶園混在型の小規模な集落地域、4)茶園のほとんどない集落地域に区分された。1900年頃には、茶園の割合は低く、一部に特徴的な茶園混在型の集落が見られたただだったが、1950年頃までに茶園の分布は家山川上流域と笹間川下流域へと拡大し、千頭地区を中心とした茶園混在型の集落形態も下流へ拡大した。境川上流の集落で茶園が急速に拡大したのは1950年以降であった。針葉樹人工林は、1950年に以前には一部で大面積に見られたが、ほとんどは小面積の分布であった。1950年頃以降になり、寸又川流域を除いた全域に針葉樹林が拡大し、主要な景観構成要素となった。現在のように茶園と針葉樹人工林の2つに特化した土地利用が出現したのは、1950年頃以降であった。

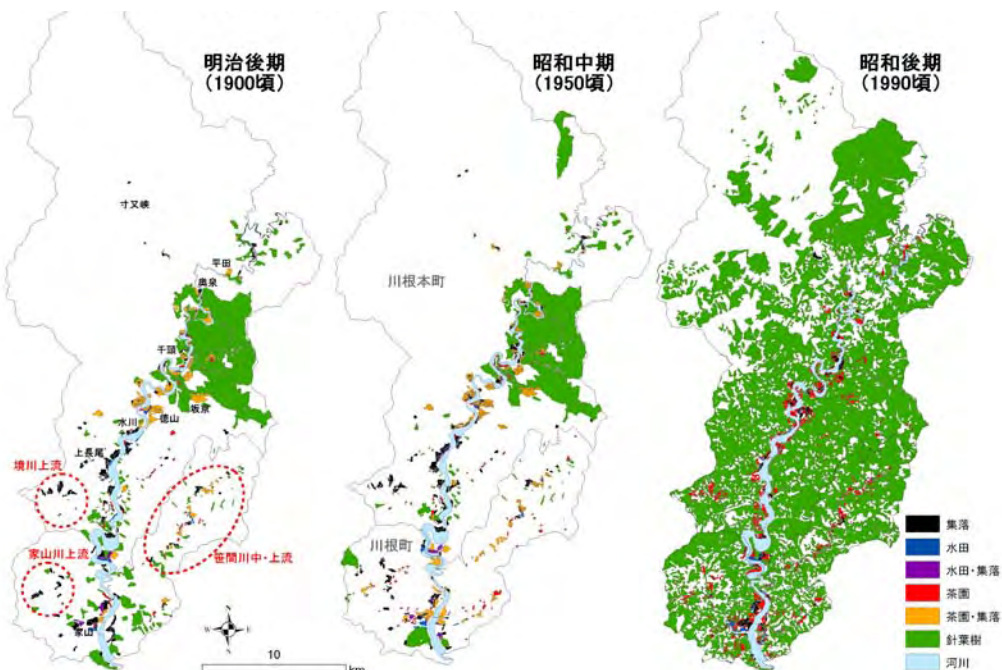


図1 川根町・川根本町における約90年間の土地利用変化

2 大井川中流域に対する景観認識

対象地域における一般の人々による景観認識を探るため、「奥大井フォトコンテスト」の約500点の応募写真、大正・昭和初期の絵はがき31点などを収集した。さらに県外の学生および中国人留学生を対象に地域内を歩きながら写真を撮影する調査を実施し、好ましい景観好ましくない景観を記録した。これらの写真記録から、主要な撮影対象が景観の中でどのように認識されているかを分析した。

茶畑景観については他の要素とセットで現れる場合が多く、鉄道などとセットの場合は前景要素として(図2)、人物や生活文化が対象の場合は背景要素としての構成が多かった。鉄道景観については河川・橋梁とのセットや季節の植物とのセットで現れる場合が非常に多く、特徴的な景



図2 鉄道の前景として効果的に印象を与える茶畑

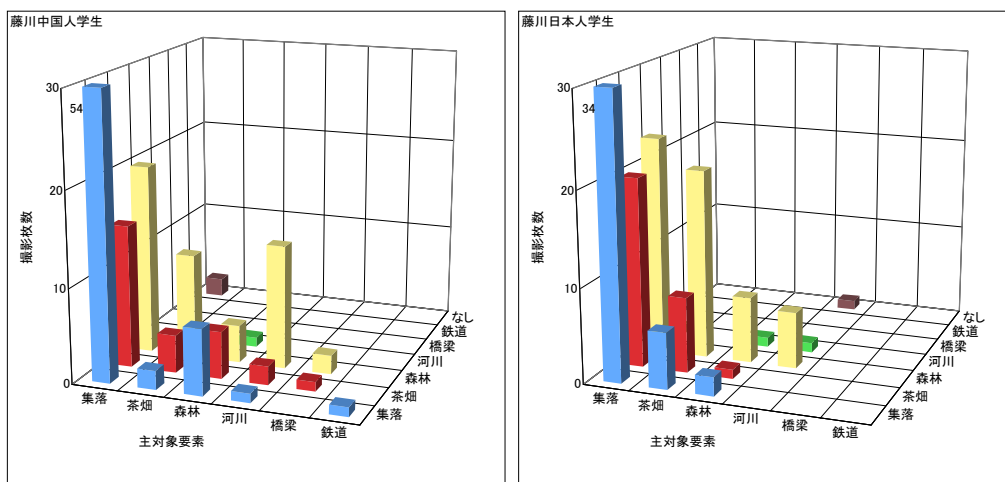


図3 日中学生間の景観認識の比較例(藤川地区)
右が中国人、左が日本人、茶畑や森林の棒グラフの高さが異なる

観要素の組み合わせとなっていた。伝統行事や農作業を扱った生活文化景観については、昔は河川と生業活動とのセットが見られたのに対して、現在では釣りや遊びなど非生業的な行為とのセットとなっていた。

以上のように、茶畑については鉄道や建造物などの人工構造物との組み合わせ、河川については橋梁の重要性など、大井川中流域の景観イメージの形成にあたって重要な組み合わせとその構造を示すことができた。また、日中学生間の認識の比較からは、日本人が茶畑のような生業的要素を強く認識しているのに対して、中国人は山地の森林や河川などの地形的な基盤の自然性に着目していた(図3)。良く発達した森林に囲まれる山間地集落の状況は、海外からの来訪者にとっても有効な景観資源になり得ると考えられる。一方で、集落の景観全体を見渡せる眺望景観を体験できる場所は限られており、地域の骨格的な景観要素である茶畑や森林の美しさを楽しめる視点を、積極的に開拓することが景観向上のために必要である(図4)。



図4 地域を見渡せる眺望景観の確保は重要な課題である

地域住民と建築士等との協働による「大井川中流域 “景観育て”」

社団法人 静岡県建築士会

背景目的

恵まれた地域景観は昔からそこにあったわけではなく、地域の人たちが営々として暮らしてきた日々の積み重ねと生活の蓄積の過程が景観に現われているといえる。しかし、大井川中流域では地域を支える人口の減少、つまり景観形成の担い手(地元住民、企業・行政)の減少が顕著になり、協働による戦略的な「景観育て」が必要になっている。地域景観を守り・育て・創り・広げていく「景観育て」のプログラムを示し、地域住民が地域景観の素晴らしさを再認識する手助けを行い、それをどのように育てるか、地域振興に活かしていくかを模索し、提案する。

研究成果

景観は生活の営みが色濃くにじみ出たものであり、地域に積み重ねられた生活の総体、すなわち集落構造の総体を問題にすべきなのである。川根町の7集落(葛籠・石風呂・抜里・笹間渡・原八坂・渡島・家山)について調査し、12の事実が判明した。

①地形を読み込み居住の場がつくられている

生活の場所は人々が自然環境・立地環境を詳細に把握するなかから形成された。7地区は、大井川が造り出す地形、土地の小さな起伏や水の流れなどが織り成す微地形を巧みに読み込みながら生活の場を形成している。

②居住の場と生産の場が融合している

居住と生産の場は生活を持続的に維持していくために密接な位置関係にあり、選択と適応を繰り返すことにより形成されたといえる。

③敷地の境界があいまいでありながら、プライバシーが保たれている

道路から住居までの“引き”が存在するためプライバシーが保たれている。3つの型に分類される(図5)。

④地形になじんだ道路の形態である

道路は生活の基盤である。人が歩く道は上がったり下がったり、平であったり曲がったり、微地形に合わせた形態である。

⑤幹線道路と細街路がうまく組み合っている

⑥母屋の向きが群をつくり層をなしている



図1 石風呂:等高線と家屋配置



図2 原八坂:谷に住居が立地

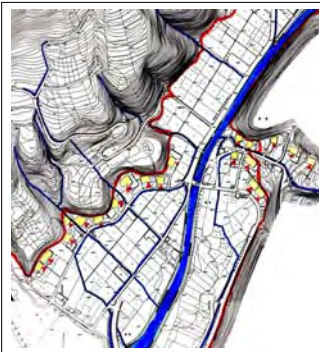


図3 渡島:同じ標高に住居配置



図4 抜里:道路と茶原

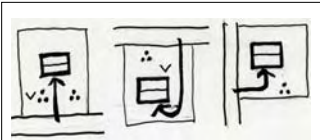


図5 道路から住居までの“引き”
左から直線型、釣針型、鉤型



図6 家山:幹線道路と細街路



図7 家山:瓦(青)・トタン(赤)葺き

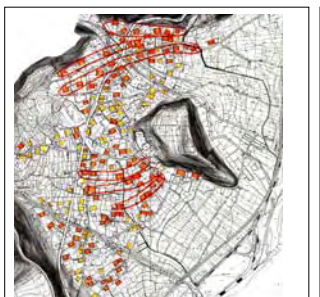


図8 抜里:母屋の層分布



図9 石風呂:母屋の層分布



図10 笹間渡:母屋の段階的な層分布

⑦建築物に高いものがない（火の見櫓が突出）

建築物は高くして2階建てで、10mを超えることはない。これはごく当たり前のことで、普段は気に留めないと思われる。そしてその中に10mを超える火の見櫓が立っている。



葛籠 拔里 家山

⑧瓦葺き・トタン葺きの屋根が混在している

家山は大正10年と昭和35年に中心市街の大半を焼失する大火があったが、その経験から罹災地は瓦葺きが多いというわけではない(図7)。瓦葺きとトタン葺きが混在し、これは7集落に共通している。

⑨大井川の玉石が至る所に使われている

玉石は一番身近に存在する建設材料といえる。平地以外の傾斜地では必ず使われている。玉石が使われている箇所は宅地、茶畑、水路である。



渡島 家山

⑩住む場所が見渡せる、眺望できる場所がいくつもある

大井川中流域は変化に富んだ地形を形成しているため、周囲の山や集落の丘や対岸の小高い河岸段丘から、自分が住む地域を容易にながめることができる場所が多い。



葛籠:県道沿いから見る

⑪魅力いっぱいの小さなもの・装置が存在する

まちや集落を舞台にたとえると、住居や茶畑などの大道具だけでなく、さまざまな小道具がたくさん存在する。



家山:花いっぱいの玄関先

⑫自然を愛で花を愛する心が感じられる

家の前や道沿いに個人で、あるいはグループで花を植えて育てている。花を愛する心が感じられる。住む人の温かい心が感じられ、ほっとして心がなごむ。

図11 各集落の魅力の例



7集落のうち4地区について、表1のように提案する。この提案は建築士会が先行して独自に提案したものであるから、地域住民が評価し、また自分たちの計画とするため

修正や改善すべきところがあるかも知れない。一方、景観まちづくりは地域の発意からはじめていくべきであるから、地域住民が主体となった景観育ての推進組織に建築士会が参画していくことが望ましい。

図12は町内会等の「地縁」によるコミュニティのつながりを大切にして、「知縁」や「志縁」と関係し合い、これらに建築士会が専門的知識・技術力等により協働していくしくみを示している。育てるとは続けていくことであり、建築士会は継続的かつ持続的に景観育てにかかわっていきたくと考えている。

表1 4地区の提案

石風呂	①高低差40mの住景観環境創造 ②林間学校の開設 ③朝日段公園の活用
拔里	①五輪菩薩周辺の眺望地の整備 ②散策ルートと散策空間づくり ③景観写真記録集の制作
笹間渡	①散策回遊ルートと沿道空間演出 ②川根温泉沿いの整備
家山	①散策遊歩道と玉石遊歩道の提案 ②まちのお宝・小さな装置さがし

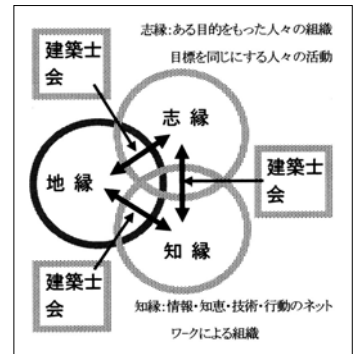


図12 地縁・知縁・志縁の多重性

(研究担当者・連絡先) 大澤 稔 ○塩見 寛 木村精治 生田八朗 伊久美新一 建築士会志太支部有志 (○リーダー) TEL 054-254-9381

大井川中流域における茶園景観の特徴と評価

静岡県農林技術研究所茶業研究センター

背景 目的

大井川中流域に位置する川根地域は、全国的に有名な高品質茶の生産地であり、茶は地域農業の基幹作物である。また、豊かな自然環境やSLなどの観光資源に恵まれた県下でも有数の観光地であり、地域の茶園は風光明媚な景観の中で重要な役割を果たしている。しかし、近年、担い手の減少等に伴い耕作放棄茶園が地域各所に散見され、地域住民の観光資源としての茶園景観への意識も希薄化していると推察される。そこで、本研究では、当地域の茶園景観を観光客の目線からとらえ、その特徴と景観に対する住民意識を明らかにするとともに、得られた成果を茶を主体とした地域振興に役立てる。

研究 成果

1 川根らしい茶園景観の特徴

川根町身成から寸又峡までの車窓景観中の茶園占有率は、平均5%で、占有率10%以上が46地点中9地点あった。対象とした県内の代表的な中山間茶産地である安倍川流域及び天竜川流域と比べ、大井川流域（川根地域）における茶園の出現頻度は高いことが明らかになった（図1）。

大井川中流域（川根地域）の茶園景観の特徴として、河川沿岸に地形に沿った緩傾斜茶園が多いことや連続性があることなどがあげられ、その成立要件として、緩やかな地形、産地の立地状況（図2）、河川の蛇行が関係していると考えられた。

2 茶園景観の評価

優良茶園景観について、地域内外の住民に対するアンケート（SD法）による評価実験を行った結果、全体的な傾向として山間部の景観の選好度が高くなり、標高の低いところでも丘陵から見下ろせる景観は地域住民の評価が高くなった（図3）。

各景観の選好度は、アンケートの評価尺度（景観に対する印象を表す形容詞）に規定されると仮定し統計的分析を行った結果、地域住民では「開放感がある」「整然としている」という印象を強く与える景観の人気が高くなり、地域外住民では「静かな」「自然が豊かな」という印象を強く与える景観の人気が高くなった。また、

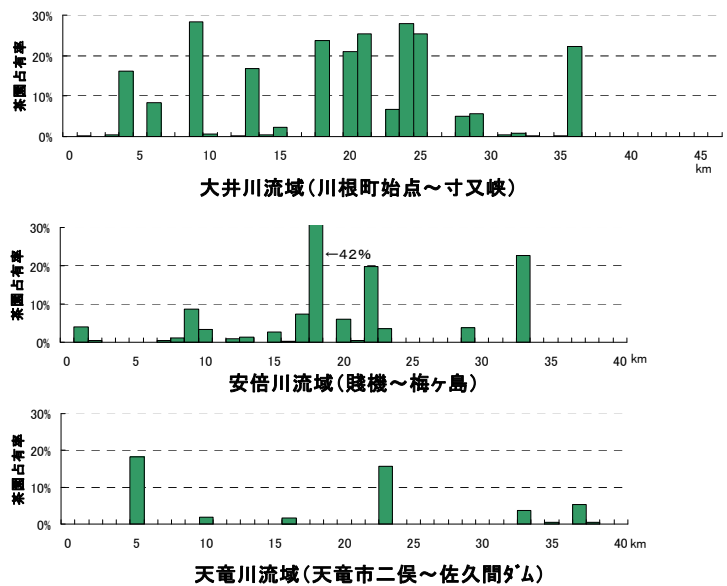


図1 三河川流域の車窓景観における茶園占有率

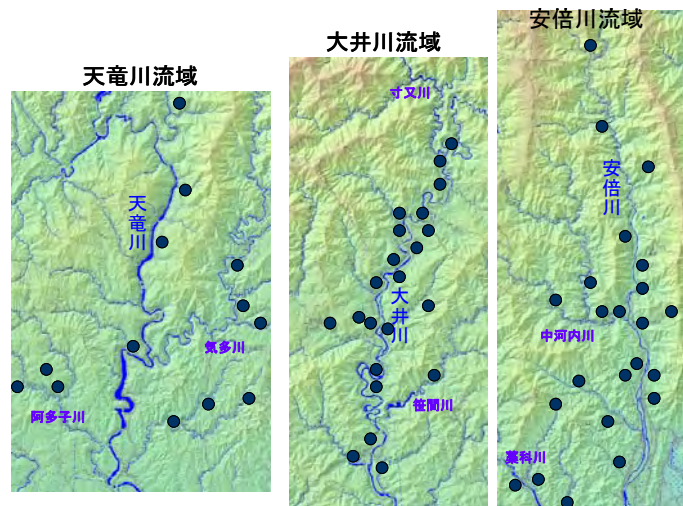


図2 三河川流域の茶産地の分布

好ましくない景観構成要素として、電線・電柱、住宅建造物、ガードレール、鉄塔などが指摘され、防霜ファンについては、地域外からの来訪者にとっては景観の障害物として気になっていないと推察された(図4)。

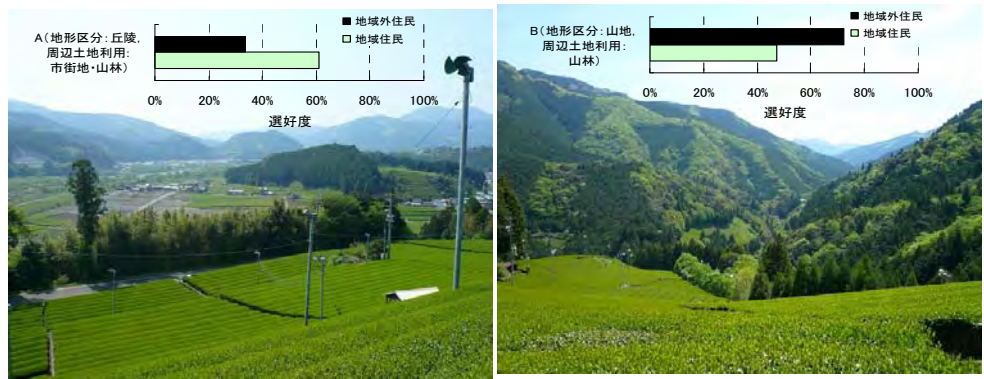


図3 評価の高かった景観(A,B)

**提言
提案**

1 茶園景観の活用策

①川根茶のイメージアップ:

清流大井川や自然環境に恵まれた山間地の良いイメージを商品に付加する。都市住民(=消費者)が好みそうなイメージを重視して茶園景観を選定し、茶商品のパッケージ、パンフレット、HPなどに活用する。

②川根茶園八景の創設:川根地域の自然と調和した多くの優良茶園景観から選りすぐられた「川根茶園八景」を創設しビューポイントとして整備する。

③グリーンティーツーリズムへの活用:緑茶の振興と静岡らしい観光を提案するため茶産地やお茶の歴史、お茶のおいしさを訪ねるとい「グリーンティーツーリズム」に景観観賞やお茶体験を組み入れ、来訪者に茶を五感で体験してもらう。

④フィルムコミッションへの茶園景観の提供:川根地域にある、清流大井川、SL、渓谷など豊富な素材を映像化・画像化し、フィルムコミッションへ積極的に提供する。

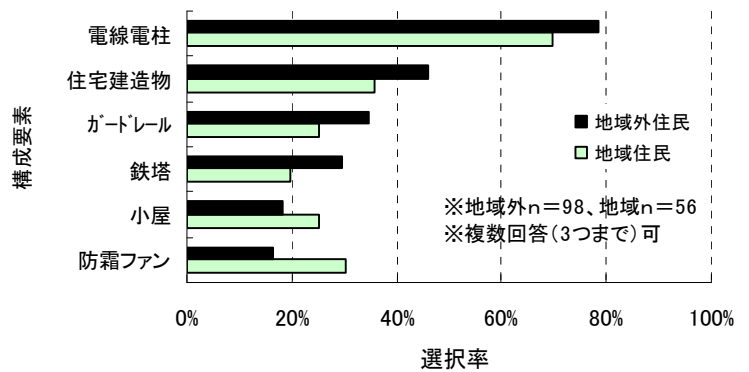


図4 好ましくない景観構成要素

2 茶園景観の保全策

著しく景観を損ねる耕作放棄茶園の大きな発生要因となっている茶園管理の労働力不足を補うため、地域内での茶工場組織を核とした共同作業や生産組織による作業受託が取り組みやすい(図5)。また、地域外からの



図5 共同摘採の様子



図6 静岡大学農学部生による農作業支援(静岡市大代地区)

農作業支援として、県内の農山村6地区で一社一村しずおか運動(静岡県建設部農地計画室)を活用している。農山村には労働力が確保され、企業側は社員教育が促進され、住民と支援者間の交流が地域の活性化にもつながっている(図6)。

南伊豆地域における景観的特徴の解明と再評価

東京大学大学院農学生命科学研究科

背景 目的

川端康成が「伊豆は詩の国であると、世の人はいう」と『伊豆序説』に記したように、伊豆はその景観の多様性と素朴な郷愁が、文人をはじめ多くの人々を惹きつけてきた。しかしながら、近年では人々の生活様式など社会状況の変化を反映し、その景観も変容しつつある。また、ひと口に伊豆と言っても、東、西、中、南など、地域によって景観は異なっている。そこで、本研究では、(1) 伊豆および南伊豆地域の景観的特徴を把握し検討すること、(2) 景観と景観を形成した要因との関係、およびその関係性の変容について把握し検討すること、(3) 南伊豆町における景観資源を再評価し、景観の取り扱い方策について検討し提案すること、の3点を目的とした。

研究 成果

1) 伊豆および南伊豆地域の景観の特徴とその形成要因

伊豆の文学作品における景観の記述の分析から、人々に認識されている伊豆地域の景観的特徴として以下のようなことが明らかとなった。

- ① 伊豆地域の景観の典型は5つに整理(表-1)でき、山や川、海など5つの典型的景観の中心となる多様な自然が存在すること(図-1、2)
- ② 自然景観と人文景観が一体化していること
- ③ 時間の経過とともに生起する光と陰など、移ろいの風景が一つの典型として抽出されること

また、南伊豆町の地域住民が捉える南伊豆の景観の特徴、魅力の分析からも、撮影された写真が大きく「海」の風景と「里」の風景に二分され、里については人文的、文化的景観として捉えられているのに対し、海については純粋な自然景観として捉えられており、自然景観と人文景観が乖離していることが明らかとなった(図-3、4)。

一方、上述した人の景観に対する認識の変化だけでなく、地形図や空中写真などの分析から、実態としての景観の側面からも、自然と人との関わりを色濃く残

表-1 伊豆地域における景観の典型と構成要素

I 山の風景	
要素	山・峰・丘・森林 樹木 動物 茅・柴・山菜 岩・石 水・水音 竹・竹藪 草叢・茂み 杉・杉林 薪・炭焼・焚き火 地名(林野系)
評価	小さい・細い・せまい 白い 大きい・長い・広い 静か・ひっそりと 青い
II 川と温泉街の風景	
要素	交通(道・街道・鉄道) 川・谷・溪谷 店舗・商店 村・街並み・集落 温泉 天城 地名(河川系) 雪・氷・霜 観光・観光客
評価	小さい・細い・せまい 白い 大きい・長い・広い 美しい・綺麗 寒い・涼しい・冷たい 辺鄙・鄙び
III 里のくらしの風景	
要素	民家・建物・庭 農業・田畑 神社・寺・民間信仰 花卉 桜・梅・花木 果実・野菜 公共施設・公園 祭礼・行事
評価	小さい・細い・せまい 白い 大きい・長い・広い 青い
IV 海と漁業の風景	
要素	海・岬・浜・崖 波・潮 港・船着場・防波堤 漁業・船 地名(海洋系)
評価	小さい・細い・せまい 白い 輝く・光る 青い 好き・魅力ある
V 移ろいの風景	
要素	太陽・空・雲・月 風 夜・闇 雨・霧・靄 夕方・夕暮れ 春夏秋冬 朝・夜明け 屋 匂い・香り 富士
評価	小さい・細い・せまい 白い 静か・ひっそりと 美しい・綺麗 輝く・光る 青い 寒い・涼しい・冷たい 明るい ゆるやか・なだらか 暗い 薄い・淡い 穏やか・和やか 激しい・荒い 柔らか 晴れた

注) 要素はクラスター分析の結果からグループ化し、評価はクロス集計の結果から要素との関係を把握し、グループの中に入れた。

す里山的空間が減少し景観が変容していることが明らかとなった。

2) 南伊豆地域の景観資源や認識の変容にみる課題

今後の風景づくりの視点から、南伊豆地域の課題について整理すると、

- ① シンボルとなる風景の形成を行う必要があること
- ② 自然景観と人文景観との融合にむけて認識を強化してゆくことが必要であること
- ③ 風景を構成する諸要素の関係性を再認識、再評価する必要があること

が考えられた。

提言 提案

エコツーリズムの観点から本研究の成果について検討し、必要な取り組みについて整理を行った。一つは、自然体験プログラムを提供し、民間企業や行政と協働し、プログラム開発など伝える技術の蓄積にむけて積極的に取り組んでいくことが重要である。二つ目は、環境配慮型の行動へと誘導し自然資源や人文資源の保全を図っていくことである。三つ目は、人やモノ、情報など地域内の連携を促すことである。以上のような取り組みを通じて、来訪者だけでなく地域住民が風景に関する認識を高めることがきわめて重要であると考えられる。



図-1 典型的景観Ⅲ「里のくらしの風景」
『岩波写真文庫 138 伊豆半島』(1955)より 湯ヶ島



図-2 典型的景観Ⅳ「海と漁業の風景」
『岩波写真文庫 138 伊豆半島』(1955)より イワシ干物



図-3 地域住民が撮影した里の風景



図-4 地域住民が撮影した海と岩の風景

(研究担当者・連絡先) ○下村彰男 井出雄二 鴨田重裕 齊藤陽子 山本清龍 (○リーダー)
TEL 03-5841-5208

伊豆半島の特徴的な景観とその自然環境

静岡県農林技術研究所森林・林業研究センター

～ 豊かで特異的な自然環境が伊豆の特徴的な景観形成に貢献していることを証明 ～

背景目的

伊豆半島は、本州では唯一フィリピン海プレート上にあり、今から100万年ほど前に太平洋上に浮かぶ島だった原伊豆半島が本州に衝突し、その後の激しい火山活動によってできたものである。伊豆半島の植物相は、その火山の影響を受けた場所特有の植物や南方系の植物そして伊豆諸島との共通の植物など、多様な起源の種を含む豊かな場所である。有史以前にはほとんどの場所がシイなどの常緑広葉樹林に覆われ、天城山などの高い部分にはブナ林が広がっていたと思われる。

しかし、江戸時代以降は大消費地江戸に近く船の便も良いことから、森林はコナラなどの薪炭林に変わってしまった。その後、戦後の燃料革命により薪炭林は放棄され、常緑樹林化が進んでいる。

そのような歴史的背景を踏まえ、現状の自然環境を代表的な植生や景観地で調査し、それぞれの景観を自然環境から再評価し、観光地伊豆の復権に寄与することを目的とする。

研究成果

1 伊豆の植生・植物

伊豆半島の代表的な植生、すなわち原生的植生である常緑広葉樹林（西伊豆町大沢里白川のシイ林）とブナ林（天城峠）そして最も面積の広い広葉樹二次林（松崎町牛原山のコナラ・クヌギ林）の3ヶ所、また伊豆の特徴的な観光地・景観である河津七滝（シイ林）、細野高原（草地と湿地植生）、須崎（海岸植生と海岸林）、松崎町石部の棚田（周囲のコナラ林やシイ林を含む）の合計7ヶ所を例にとり植生・植物相調査を実施した（図1）。

その結果、原生的環境の天城峠や白川は貴重種を多く含み、伊豆を特徴づける固有種や南方系の植物などを多く含むことが分かった。河津七滝も原生的自然ではないが、白川と似た環境であることが分かった（図2）。牛原山と石部の棚田の周囲の広葉樹林は、薪炭林が手入れをされなくなり放棄された林で、落葉広葉樹林から常緑広葉樹林へと様々な程度で遷移途上にあった。植物相は豊富だが、貴重種や伊豆の特徴的な植物は少なかった（図3）。須崎は伊豆の海岸を代表する場所であるが、かつてあったクロマツ林は松くい虫によりほとんどなくなり、常緑広葉樹林化が進行していた。しかし、岩礁海岸には特徴的な植生と貴重種や固有種が多く、花のきれいな種が多いという特徴もあった。細野高原は、県下でも最大規模の草地と伊豆で最も良い湿地が残された場所で、貴重種が非常に多かった。石部の棚田



図1 調査地の景観（一部）

表1 各調査地で確認された植物の種数と県版レッドデータブック（RDB）掲載種

調査地	科数	種数	RDB種
天城峠	81	179	7
白川	96	274	7
牛原山	89	228	2
河津七滝	96	287	7
須崎	79	197	4
細野高原	87	321	14
石部	99	320	3

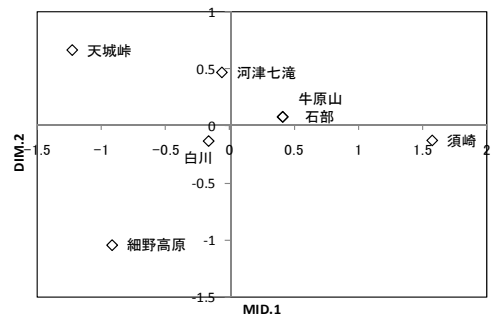


図2 各調査地の植物相について共通指数（CC）を求めMSDにより座標付けした結果

は、平地では少なくなった水田雑草が見られた。



図3 各調査地で見つかった貴重種や固有種

2 コウチュウ相

伊豆半島動物相に関して、種類の多さや食性が多岐に及んでいることからコウチュウ目昆虫を例にとり、植物と同じ場所でトラップ等を用いて調査した。移動の激しい昆虫を定性・定量的に捕獲できるマレーズ・トラップを使った調査では、県内の他の地域の結果と比較し、原生的な植生の天城峠と白川では種の多様性が極めて高いことが分かった（表2）。また、牛原山も、同様に里山環境にある他地域の調査地と比較して多様性に富んでいることが分かった。他のトラップ等の調査からは、伊豆の今回の調査地では、白川と河津七滝、牛原山と石部のそれぞれの調査地間でコウチュウ相が近似しており、須崎や細野高原はそれぞれ独特のコウチュウ相をしていることが分かった（図4）。

表2 伊豆の調査地3ヶ所と県内各地のマレーズ・トラップによるコウチュウの捕獲調査の結果

調査地	天城峠	白川	牛原山	浜松市西区 佐鳴湖 根川山	浜松市中区 佐鳴湖 椎の木谷	袋井市愛 野小笠山 下部	袋井市愛 野小笠山 上部	牧之原市 切山	静岡市駿 河区有 度山
標高	900m	300m	200m	20m	20m	100m	150m	100m	150m
調査年	2007	2007	2007	2006	2006	2003	2003	2005	2003
科数	48	44	43	26	30	41	33	31	32
種数	435	327	290	76	107	166	152	113	124

各調査地ともマレーズ・トラップ3基(佐鳴湖の2ヶ所は2基)でほぼ1年を通して調査した結果。

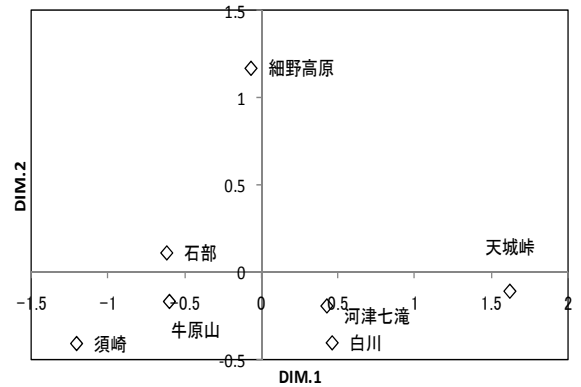


図4 各調査地の植物相について共通指数 (CC) を求め MSD により座標付けした結果

捕獲されたコウチュウの中には、県内で初記録となった種をはじめ多数の貴重種が含まれていた。特に、植物と同様に原生的な植生の天城峠や白川にこれらの種が多く、それ以外でも須崎では海流伝播と考えられる南方系の貴重種が、細野高原では草地や湿地に生息する貴重種がそれぞれ多かった。

提言 提案

伊豆半島は、その特異な成立過程が起因となって、特殊で多様な植物相を持つことになった。そして、それに伴い動物も同じように多様性に富んだ動物相を持つに至ったと考えられた。特に、それは原生的、またはそれに近い環境の天城峠や河津七滝などに色濃く表れていた。また、観光地として有名な須崎（爪木崎などを含む）や山菜狩りやパラグライダーなどで有名な細野高原も、それぞれ特異で貴重な生物相を有していた。

近年、景観は視覚的なものだけではなく、その背後にある歴史的背景や自然環境をも含めた概念で論じられることが多い。その意味で、伊豆のそれぞれの有名な景観は特異で豊かな生物相に彩られた本当に美しい景観をしていることが明らかとなった。このことは、観光地伊豆の良き PR ポイントになると思われ、また最近盛んなエコツーリズムに活用されることなどを期待する。

（研究担当者・連絡先）○加藤 徹 多比良嘉晃（日本昆虫学会）（○リーダー） TEL 053-583-3121

地域協働型調査による伊豆半島の歴史的景観を構成するローカル文化圏域の解明

京都大学大学院工学研究科

～民家の共通点を見つけながら伊豆をめぐる～

背景 目的

「地域にねざした民家の特徴が、どのような地理的範囲で共通しているか」という視点から、伊豆半島中南部沿岸の景観をみることを提案するのが、本稿の目標である。

この、民家の特徴が共通する範囲を「ローカル文化圏域」と呼称している。

歴史的景観を民家からみる場合、築年数が長く改造の少ない民家を資産として評価することが一般的であるが、ここでは、改造が多い場合でも部分に残っている特徴を評価し、集落間の共通点や相違点を認識する点に重きをおいている。また、昔ながらの民家が少数しか残っていない地域においても共通点を見出そうとするアプローチは可能であるので、伊豆半島中南部沿岸地域の全体について考察するに適した視点であると考えて取り組んだ。

研究 成果

以下に調査から見出されたローカル文化圏域の候補と、その特徴を示す。

(1) つし二階建ての屋根のかたち 明治期までは茅葺き民家が多く、地域によっては昭和30年頃までよく残されていた。現在も、屋根や外壁が改装されつつ茅葺き民家の構造を受け継ぐ建築物がみられる。屋根を変える際、つし二階とし、切妻屋根とした地域と寄棟とした地域にわかれる。

(2) 漆喰・海鼠壁からみるローカル文化圏域 漆喰・海鼠壁仕上げを担う左官職人は松崎町を拠点に広く活躍してきた。母屋と蔵についての第一の見方は、漆喰・海鼠壁をどこに配するか、である。強風対策の必要な沿岸地域にあって漆喰・海鼠壁は防火と防腐の役割を担うので、建物の四周どの部分に防火対策を講じようとしたかに特徴が現れる。屋根以外の部分ほとんど全てを海鼠壁で覆う「総海鼠造」と一部を漆喰一部を海鼠壁とする「部分漆喰・海鼠壁」、一部を漆喰とする「部分漆喰」にわけ、その拡がりからみるローカル文化圏域の想定を図1に示した。また、漆喰・海鼠壁には、職人技による高度な意匠としての見方があり、海鼠壁の割り付けや仕上げ、鰻絵の有無に特徴が見



母屋：部分漆喰・海鼠壁一切妻（仁科） 母屋：部分漆喰・海鼠壁一切妻（松崎） 母屋：総海鼠造一寄棟（下田）



蔵：総海鼠造+伊豆石（下流） 蔵：部分漆喰・海鼠壁（松崎） 蔵：同左+板張り（田子） 鰻絵（松崎）

られる。この特徴の顕著であるのは松崎である。鰻絵が多いことと、切妻が多く妻壁・持送り・開口部まわり等に工夫をする余地が見出しやすいことと関連するという仮説が考えられる。

(3)板張りペンキ塗装からみるローカル文化圏域 (2)とは大きく異なる存在が土壁の上に板張りとしカラフルなペンキ塗装を用いる民家である。この民家が集中してみられる集落は図1のように一見点在しているが、かつて海豚漁のおこなわれていた漁港とも一致する。同じ集落でももと農家であった民家は(2)と同様の特徴をもつ。そこで、仮説ではあるが、集団化された漁業が発達した地区で急速に世帯が増え住宅が増えた際に板張りの民家が増え、板に防腐剤が塗装されていたものが昭和30年代頃からペンキに変わっていったものが多いと想定している。



母屋：下見板張り+ペンキ (安良里)

母屋：同左 (戸田)

母屋：同左、塗装しない部分もあり (田子)

板張りにペンキ塗装の民家が集中する事例は、紀伊半島南部沿岸、知多半島近くの島等で既報があり、太平洋沿岸の集落に広域に点在する。地域の近代化とともに生まれた独特のスタイルとみることができ、ローカル文化圏域として認識することとした。

**提言
提案**

以上を、総合してまとめると、右の図1のようになる。この図は、今のところ、詳細な調査をさらに重ねると、圏域の境界の位置を訂正するなどの修正がありうる、想定図である。しかし、実際、伊豆半島の沿岸をめぐる際に民家の姿を本稿にあげた視点から見ると、地域によって姿が変わっていく様子が見える。

改造が進んだ民家の部分に残る特徴も、広域にみるとわかりやすい文化の拡がりを現す要素とみることができ、今後、地域に民家の一部分にでも残る特徴があれば、まちの特徴として注目してみてもいいだろう。



図1 屋根のかたち、漆喰・海鼠壁、板張りペンキ塗装の視点からみて想定されるローカル文化圏域の分布

(研究担当者・連絡先) ○神吉紀世子、氏田博子、今北基喜、山崎義人(神戸大学工学研究科 COE 研究員)、他 (○リーダー) TEL 075-383-3277

伊豆地域に自生するサクラの多様性の評価と景観形成への利用

静岡県農林技術研究所伊豆農業研究センター

背景 目的

伊豆地域には特色のあるサクラが数多く存在する。このうち‘カワヅザクラ’の開花期間に開催される「河津桜まつり」と「みなみの桜と菜の花まつり」には多くの観光客が訪れ、地域の重要な観光資源として位置づけられている。一方、伊豆地域にはこれ以外にも3月以前に開花する早咲きのサクラが多数自生しており、観光資源として利活用することが望まれている。このため、伊豆地域に自生するサクラの特性を調査し、地域固有の観光資源としての活用法について検討した。

研究 成果

1 サクラの形質調査と形質比較による特性評価

平成19年1月26日から4月10日の期間に、伊豆地域内の2分咲き以上のサクラ243個体について調査を行った。調査したサクラは形態的特性および来歴等から、‘カワヅザクラ’、‘カワヅザクラ’実生個体（以下‘カワヅ実生’）、‘オオシマザクラ’およびそれ以外のサクラ（以下その他のサクラ）に大別された。これらの開花時期は、2月下旬から3月上旬が多かったが、いずれの時期にも何らかのサクラの開花が見られた（図1）。花色では淡いピンクが多く、次いで白が多かった。‘カワヅザクラ’は淡いピンクが多く、‘カワヅ実生’はやや濃いピンクが多くみられた（図2）。

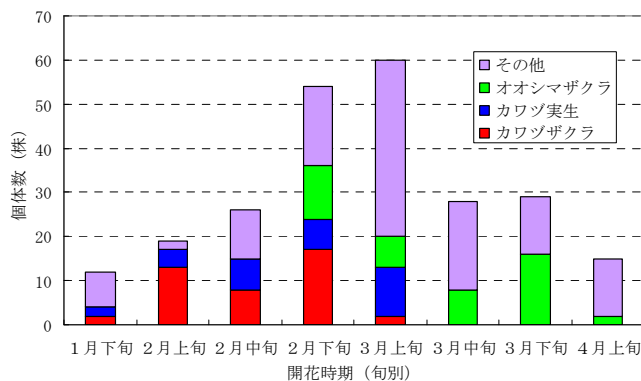


図1 伊豆地域に自生するサクラの種類別開花時期 (n=243)

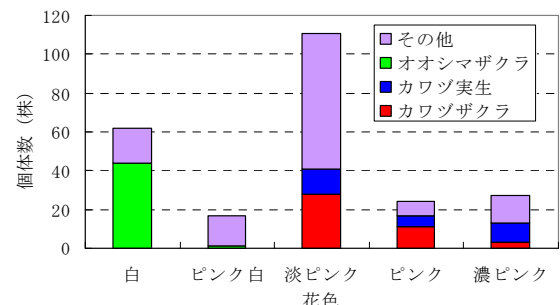


図2 伊豆地域に自生するサクラの種類別花色 (n=243)

○特徴のある個体

調査個体の中で、各地区で特徴のある個体が確認された（図3～5）。



図3 ‘カワヅ実生’ (南伊豆町石廊崎)
開花時期: 2月下旬
花に香りあり



図4 ‘カワヅ実生’ (河津町峰)
開花時期: 3月上旬
旗弁が多く、花も大きい



図5 ‘オオシマザクラ’ (西伊豆町大沢里)
開花時期: 4月上旬
旗弁が多く、花弁が丸い

2 サクラ調査個体の地理的分布のマップ化

調査した個体を地図に示し、種類別、特徴別による地理的分布を明らかにした（図6）。



図6 花色が濃ピンクのサクラの地理的分布図

3 サクラの栄養増殖方法等の検討

桜葉用‘オオシマザクラ’の枝挿しを行ったところ、挿し木時期は5月が最も良好であった（図7）。用土は鹿沼土、調整ピート、両者の混用で差は見られなかった。



図7 緑枝挿しで発根した‘オオシマザクラ’（6月挿し 用土：調整ピート+鹿沼土）

提言 提案

今回の調査で伊豆地域内には‘カワヅザクラ’以外にも1~4月に開花する、様々な特性を持ったサクラが存在することが明らかになった。また、1月下旬以前、4月上旬以後に開花するサクラが存在することが知られている。今後、これらの地域資源を生かし、伊豆半島内でのサクラの鑑賞時期を延長して、観光から地域の活性化が図られることを望む。その際に、今回の調査データを参考にいただければ幸いである。当研究センターでも、サクラを中心とした地域資源の増殖法や品種の育成等の研究を行っていく予定であるので、随時情報の提供を行っていきたい。

静岡県戦略課題研究『大井川・伊豆』研究課題・研究機関 一覧表

◎ 大井川中流域（主な対象地域：川根町、川根本町）

研究テーマ「自然と調和した大井川流域の景観形成」

研究課題名	研究機関・研究者名	研究代表者、連絡先
地域性をふまえた大井川中流域の景観の保全と活用に関する研究	京都府立大学人間環境学部准教授 深町加津枝、(同)農学部助教 三好岩生、独立行政法人森林総合研究所関西支所主任研究員 奥敬一	深町加津枝 電話：075-703-5436 Eメール： fukamachik@kpu.ac.jp
地域住民と建築士等との協働による「大井川中流域“景観育て”」	社団法人静岡県建築士会(景観整備機構) 代表 大澤稔、(同)副代表 塩見寛、(同)コアスタッフ 木村精治、(同)コアスタッフ 生田八朗、(同)コアスタッフ 伊久美新一、志太支部有志	大澤 稔 電話：054-254-9381 Eメール：honkai@shizu-shikai.com
大井川中流域における茶園景観の特徴と評価	静岡県農林技術研究所 茶業研究センター 主任研究員 鈴木利和、(同)研究主幹 望月和男、(同)副主任 大石哲也	鈴木利和 電話：0548-27-2884 Eメール：tsuzuki@tea-exp.pref.shizuoka.jp

◎ 伊豆地域

(主な対象地域：下田市、東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町)

研究テーマ「特徴ある自然景観を活かした『伊豆地域』の地域振興」

研究課題名	研究機関	研究代表者、連絡先
南伊豆地域における景観的特徴の解明と再評価	東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻教授 下村彰男、(同)生圏システム学専攻教授 井出雄二、(同)附属演習林准教授 鴨田重裕、(同)生圏システム学専攻助教 齋藤陽子、(同)附属演習林助教 山本清龍	下村彰男 電話：03-5841-5208 Eメール：shimo@fr.a.u-tokyo.ac.jp
伊豆の特徴的な景観を構成する植生と生物相	静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター 主任研究員 加藤徹、日本昆虫学会 多比良嘉晃	加藤 徹 電話：053-583-3163 Eメール： toru1_katou@pref.shizuoka.lg.jp
地域協働型調査による伊豆半島の歴史的景観を構成するローカル文化圏域の解明	京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻准教授 神吉紀世子、(同)大学院修士課程 氏田博子、(同)今北基喜、神戸大学工学研究科COE研究員 山崎義人、他	神吉紀世子 電話：075-383-3277 Eメール： kanki@archi.kyoto-u.ac.jp
伊豆地域に自生するサクラの多様性の評価と景観形成への利用	静岡県農林技術研究所伊豆農業研究センター副主任 石井ちか子、同センター長 杉山和美、果樹研究センター落葉果樹拠点専門研究主幹 久保田栄	石井ちか子 電話：0557-95-2341 Eメール： chikako1_ishii@pref.shizuoka.lg.jp

～ おわりに ～

景観は、長い年月を費やし、地域の人々の生活とともに形成されたものである。そして、その地域固有の景観というものは、住民にとっては当たり前のものであっても、外部からの訪問者にとっては魅力的なものであることが多い。また、景観を意識して地域を大切にすることは、そこに住む人の地域への愛着を深め、ふるさとを磨き上げていくことに繋がっていく。

本研究では、外部の専門家の目で、「大井川中流域」「伊豆地域」に固有の『ここにしかない良さ』『ここだからできること』を抽出し、さらには、それを今後どのように活かしていったらいいのか、活用策等を提案したものである。この『地域固有の大切なもの(=景観資源)』の見出し方は、どこの地域でも使えるものであり、他地域の方にも是非参考にさせていただきたい。また、その景観資源の活用においても、どうやって独自色を出すかという手法等も、他の地域へ応用できるものとする。

この研究を契機に、日ごろの生活では見過ごしがちな「自分の地域では何が大事なのか」を、地域の方々と話しあってほしい。県としてもこの成果を広めるために、平成 20 年度にはそれぞれの地域で地元の活動を支援する予定である。景観の担い手は、そこに住む一人一人であり、地元行政も一体となって、自分たちだけの“地域が誇れる景観”をつくり上げていただきたい。そのお手伝いができれば幸いである。

平成 20 年 3 月

静岡県産業部振興局研究調整室

静岡県戦略課題研究

「大井川・伊豆」研究報告書（概要版）

編集・発行

静岡県産業部振興局研究調整室

〒420-8601

静岡市葵区追手町9番6号

TEL 054-221-3643

メール kenkyuchousei@pref.shizuoka.lg.jp

※本報告書の無断の転載及び複写を禁じます。